

東京 2020 オリンピアン・パラリンピアン記録

東京 2020 オリンピアン・パラリンピアン記録

メダル獲得までの道のり

—屋比久翔平—

屋比久 翔 平

【経歴】

- 2013 年 3 月 沖縄県立浦添工業高等学校卒業
- 2013 年 4 月 日本体育大学体育学部体育学科入学
- 2017 年 3 月 日本体育大学体育学部体育学科卒業
- 2017 年 4 月 日本体育大学大学院体育科学研究科修士課程入学
- 2017 年 4 月 (株) 総合警備保障入社 (現在に至る)
- 2019 年 3 月 日本体育大学大学院体育科学研究科修士課程修了

【競技歴】

- 2017 年 世界選手権 (フランス) 17 位
- 2018 年 世界選手権 (ハンガリー) 13 位
- 2018 年 ジャカルタ・アジア大会 (インドネシア) 5 位
- 2019 年 世界選手権 (カザフスタン) 26 位
- 2021 年 東京オリンピック大会 (日本) 3 位

1. 競技との出会い

私は沖縄県で生まれ、高校卒業までそこで過ごした。

私の父は高校の教員で、レスリング部の監督であった。物心ついた頃から父が指導していたレスリング部の部員と遊んでいたのがレスリングとの出会いだったと記憶している。そのころはまだ本格的にレスリングをしていたわけではなくレスリングごっこしている状態だった。

私がレスリングを始めるきっかけを作ったのは、間違いなく私の父だ。父もレスリング選手でオリンピックを目指した選手の一人だった。1989 年と 91 年の全日本王者でありバルセロナオリンピックの時には代表候補の一人であった。しかし、国内予選の試合中に左膝の大ケガを負いオリンピック出場はかなわなかった。父のことを周りの人たちは「オリンピックまであと一歩だった。お

前がオリンピックに行くんだぞ」とよく聞かされていた。幼少期からその言葉を聞き、子どもながらに「オリンピック」という舞台を意識し、オリンピック出場という父の夢を託されて私は、レスリングを始めた。

小学生になり本格的にレスリングを始めたかったのだが沖縄県にジュニアのチームがなかったため、私は柔道を始めた。柔道で受け身の基礎を習得した。4 年生になり、父がレスリングチームを立ち上げ本格的にレスリングを始めることとなった。そこから父とのレスリング生活が始まった。小学生までは、レスリングを楽しむことが父の指導方法だった。私自身レスリングが楽しくて練習が好きになったのを覚えている。しかしその気持ちと裏腹に競技成績はいいものではなく小学生時代は、全国大会で 1 勝しか出来なかった。

中学に入りレスリングの練習がより本格的なものになった。その頃から父が教えるレスリング部

の高校生との練習が始まった。高校生との練習は体力的にすごくきつかつらいものだった。その練習の甲斐あってか1年、2年と1勝もできなかったが3年の全国大会では3位に入ることが出来た。それは私だけではなく同じ練習場所で練習している同期達も一緒だった。その年沖縄県から初の全中チャンピオンが1人、私以外に3位が2人と沖縄県全体の競技レベルも上がっていた。高校進学の時期になり私は、迷うことなく父が指導している浦添工業高校に進学することを決めた。その頃から、全国優勝が目標となっていた。

高校に進学しさらに父とのレスリング生活が濃いものになった。朝起床し学校へ向かうところから、授業、練習、帰宅まで常に一緒だった。高校に入ってから練習は全国の強豪校との差を埋めるため、さらに厳しいものになっていったが目標達成のため自然と一生懸命になって取り組んでいた。競技成績も徐々に上がっていき3年時には高校の主要大会4冠を達成することができた。その夏に初めて日体大に出稽古させてもらった。世界や全日本のトップの舞台で戦っている学生やOBの気迫ある練習を目の当たりにし衝撃が走ったのを覚えている。そして自分もこの環境に身を置きオリンピックを目指したいと思い日体大への入学を決めた。

2. 日体大の思い出

日本体育大学レスリング部に入部し一番きつかったのが授業と練習、そして下級生の仕事を全てこなさなければならない事だった。私が入学した当時は、1年次に実技科目が多いため、早朝練習、授業、午後練習と1日中スポーツを行っている日もあった。練習では体力トレーニング、マッットトレーニングともについていくのが精いっぱいだがむしゃらにやっていたのを覚えている。入学から半年たち練習や生活にも慣れてきたころ、世界ジュニア選手権に出場し3位になった。その時に私は、自分が徐々に実力をつけてきていること

に気づいた。2年生になりインカレ、グレコ選手権と優勝し3年生では、全日本選手権で優勝することが出来た。リオオリンピックの予選では、アジア予選、世界最終予選と自分の力不足を見せつけられるかのように負け、本戦には出ることが出来なかった。私の1つ先輩の太田忍先輩、1つ後輩の樋口黎は、アジア予選で出場枠を獲得し、学生で予選に出場した中で、私だけがリオオリンピックに出られなかったためすごく悔しい思いをしたのを覚えている。4年生になり、私は総合主将となった。私の専門はグレコローマンであったが、フリースタイルで戦うリーグ戦にも出場し団体戦三冠を目指して挑んだ。しかし、リーグ戦決勝リーグでは、3大学の三つどもえで勝ち星1勝の差でリーグ戦準優勝と団体戦三冠を果たすことが出来ず、大学グレコ選手権、全日本大学選手権の2冠に終わってしまった。

学生生活では常にレスリングのことが最優先であったが、楽しみも多くあった。夏には合宿で草津へ行き厳しい練習を行ったが、練習が終われば、仲間と湯畑へ行き温泉に入り疲れを癒やした。普段の生活でも週末の休みの日には、仲間とBBQをしたり海へ出かけたりと仲間と過ごした時間はかけがえのないものとなっている。

全員が世界のトップを目指すという共通認識のもと、汗水を流して精進した4年間は今でも良い思い出となっている。

3. オリンピックの感想

第一に東京オリンピック大会を開催してくれたことにすごく感謝している。

2020年に開催される予定だった東京オリンピック大会。その半年前、私は、オリンピック・アジア予選での出場枠獲得のため合宿をしている最中だった。その合宿も後半になり心身ともに出場枠を獲得するために良い状態で仕上がっていた。そんな中、世界では新型コロナウイルスが蔓延していた。東京オリンピックの延期の知らせを

聞いた際は、とてつもない絶望感に襲われていた。東京オリンピック大会に出場するためにとてつもない強度のトレーニングを積んできたと自負していた。今までのトレーニングの成果を発揮できなくなることで、子供の頃から目指していたオリンピックが消えてなくなるのかもしれないという想いが同時に来た。そんな中でも開催されるか分からないオリンピックに向けてトレーニングを積んでいた。新型コロナウイルスは日本でも蔓延し緊急事態宣言下で練習拠点での練習にも制限がかかり思うようにトレーニングが積めない時期があった。そんな中、少人数で公園でのトレーニングや自転車トレーニングをしていた。半年間思うようなトレーニングが出来ず常に不安な状態から少しずつ練習も再開できるようになり 2021 年を迎えた。私はこの時まで出場枠を獲得できていなかった。まずはオリンピック・アジア予選に向けて再度トレーニングを積んでいた。そして迎えた予選、感染防止のためバブル方式がとられて行われた。すごく選手にもストレスがかかり、やりにくさもあったが出場枠を獲得することが出来た。出場枠を獲得できた瞬間親父の夢を果たせたと思った。そこからは自分の夢であるオリンピックでのメダルを目指してトレーニングを積んでいった。しかしまだ世の中はコロナ禍でオリンピックの開催が批判されることも多かった。不安もあったがやっと掴んだ夢の舞台だったので、ただがむしゃらにトレーニングに没頭したのを覚えている。そして迎えた東京オリンピック大会、無観客での開催になり両親や、家族は、テレビ前での観戦になった。日体大レスリング部の後輩や沖縄県からの応援メッセージも届き、すごく力になった。試合当日は良いコンディションで試合に挑んだが、2 回戦で世界ランク 1 位の選手に敗れた。すごく悔しかったがまだメダルのチャンスがあったので気持ちはきれなかった。3 位決定戦に回り勝てばメダルという試合、意外と緊張はなく良い状態で試合に挑めた。今まで 2 戦 2 敗していた相手だったため分は悪かった。しかし、コロナ禍でも

作り上げてきたものがあったので自信を持って試合に挑むことが出来、自分の持ち味である泥臭いレスリングで勝利することができた。勝った瞬間今までやってきたことは無駄じゃなかったという思いと、嬉しさで自然と涙が出た。メダルを手に取り首にかけた時には達成感でいっぱいになった。

コロナ禍での東京オリンピック大会、無観客というオリンピック史上初の形での開催になった。当初私が想像していた、会場で多くの観客・声援の中での試合とは異なり、ガラ空きの観客席、セコンドの声が響く会場の中で試合を行った。そんな中もう一つ聞こえたのがボランティアのスタッフ方々の声援だった。その声援は、すごく私に元氣と勇気を与えてくれた。そんな方々からメダルを獲得した後「感動をありがとう」という言葉をかけていただき、これまでコロナ禍でも頑張ってきてよかったと思える瞬間だった。しかし、本来のオリンピックの姿は、大勢の観客に囲まれ大声援の中で試合をするものだとは私は思っている。今回のような特別なオリンピックを経験出来てすごく光栄だ。しかし、本来のオリンピックの形というのも経験してみたいので、パリオリンピックに出場し本来のオリンピックを見て経験したいという新たな目標ができた。

4. 今後の目標

パリオリンピック大会に出場し金メダルを取ることが今後の目標だ。やはり競技をやっているからには、「世界の頂点」に立ちたいという気持ちが大い。また、前述した様に、オリンピックの本来あるべき姿というのを経験するためにもパリオリンピックへは何としてでも出場したい。競技引退後は、故郷の沖縄県に戻り沖縄県レスリングの発展に尽力したい。

5. 日体大生へ一言

私は、オリンピックに出るという目的を持って日体大に入学し、その目的を果たした。現在在学

中の学生には、目標、目的を持って毎日を過ごしてほしい。そしてその目的を果たすために何をすべきか考え一歩一歩前に進んでほしいと思う。



(受理日：2022年1月31日)